千葉県立中央博物館新収蔵資料「柳田國男直筆原稿・メモ及び柳田宛書簡」について

On the Newly Acquired Collection Materials of the Natural History Museum and Institute, Chiba: “Autograph manuscripts by Kunio Yanagita and letters addressed to him”

玉井　里奈

キーワード：柳田國男，大白神考，婚姻習俗語彙，佐々木喜善，ニコライ・ネフスキー

目　次

はじめに
第一章　『大白神考』関係資料
（一）「おしら初稿了」（『大白神考』序文「オシラ様とニコライ・ネフスキー」）
（二）「祝棒の変遷」（『大白神考』原稿）
（三）「柳田國男自筆原稿と『大白神考』（実業の日本社）校合」
第二章　佐々木喜善、ニコライ・ネフスキーによる柳田國男宛書簡
（一）佐々木喜善書簡
（二）ニコライ・ネフスキー封筒（柳田國男宛）
（三）オシラ神祭祀メモ
第三章　『婚姻習俗語彙』執筆用メモ
おわりに
注
参考文献

はじめに

千葉県立中央博物館令和七年度トピックス展「民俗学の父・柳田國男―本から読み解く　暮らしへのまなざし―」（四月十五日～六月十五日）に向けて行った調査の中で、柳田國男直筆の原稿や執筆時のメモなどが新たに発見された。昭和十二（一九三七）年刊行の『婚姻習俗語彙』執筆にあたって書かれたと思われるメモ、昭和二十六（一九五一）年刊行『大白神考』の原稿、佐々木喜善から柳田宛ての書簡、そしてロシア出身の言語学者・民俗学者であるニコライ・アレクサンドロヴィッチ・ネフスキー〔一〕が柳田に宛てた書簡の封筒など計三十七点で、千葉県立中央図書館にて保管されていたものである。平成元（一九八九）年に急逝した未来社二代目社長の旧蔵書籍一式を遺族が同館へ寄贈した際、この原稿・書簡類もともに渡ったとみられる。これら三十七点の資料は、令和七（二〇二五）年三月に県立中央博物館へ移され、同館収蔵資料となった。

本稿では本資料群「柳田國男直筆原稿・メモ及び柳田宛書簡」を一覧化するとともに、解説を付す。

資料群「柳田國男直筆原稿・メモ及び柳田宛書簡」は次の通りである（詳細は表参照）。

一．『大白神考』関係資料

（一）「おしら初稿了」（『大白神考』序文「オシラ様とニコライ・ネフスキー」）

（二）「祝棒の変遷」（『大白神考』原稿）

（三）「柳田國男自筆原稿と『大白神考』（実業の日本社）校合」

二．柳田國男宛書簡

（一）佐々木喜善書簡（柳田國男宛）

（二）ニコライ・ネフスキー封筒（柳田國男宛）

（三）オシラ神祭祀メモ

三．『婚姻習俗語彙』執筆用メモ

なお、資料1～33については成城大学民俗学研究所がデジタルアーカイブとして公開している柳田國男直筆資料と比較し、封筒に貼られたラベルや用紙の使い方、筆跡などの特徴が一致することなどから本人のものと決定づけた〔玉井　二〇二五　五〕。資料35～資料37については本稿で挙げた文献のほか、遠野市立博物館所蔵の佐々木喜善日記や書簡類、ネフスキー書簡類、天理大学附属天理図書館所蔵のネフスキー書簡（複写控え）類を参考に、本人によるものとしている。

第一章　『大白神考』関係資料

昭和二十六（一九五一）年、実業之日本社より『柳田國男先生著作集第十一冊　大白神考』（以下、実業之日本社版『大白神考』と表記）が刊行された。その構成は次の通りで、今回発見されたのは、序文及び「おしら神と執り物」の柳田國男直筆原稿である。

序文（初出）

オシラ神の話（昭和三年九月、『文藝春秋』六巻九号）

人形とオシラ神（昭和四年四月、『民俗藝術』二巻四号）

人形舞はし雑考（昭和三年一月、『民俗藝術』一巻一号）
鉤占から兒童遊戯へ（昭和六年七月、『民俗藝術』四巻四号）
おしら神と執り物（昭和二十二年六月、『新國學談第二冊』、小山書店）
ネフスキイ氏書翰（初出）
（括弧内は初出〔赤坂　一九九九　七三六〕）

（一）「おしら初稿了」（『大白神考』序文「オシラ様と ニコライ・ネフスキー」）

ア　資料概要

本資料（以下、資料32）は本書の序文初校とみられる（写真1）。実業之日本社が柳田宛に送った封筒に入れられており、封筒には「おしら初稿了」のラベルが貼られている(二)。

昭和二十六（一九五一）年五月に書き上げられた原稿に赤字で校正が行われており、これらは刊行された実業之日本社版『大白神考』に反映されている。

写真1　資料32「おしら初稿了」封筒と原稿（千葉県立中央博物館所蔵）

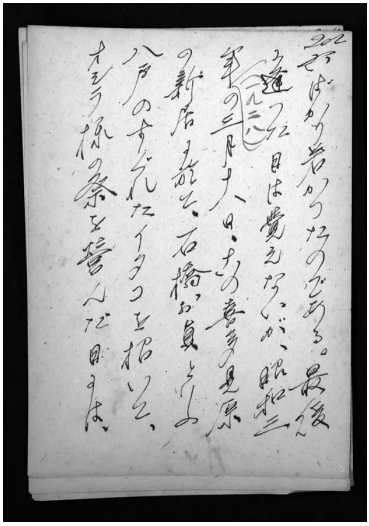

写真2　資料32「おしら初稿了」原稿
（千葉県立中央博物館所蔵）

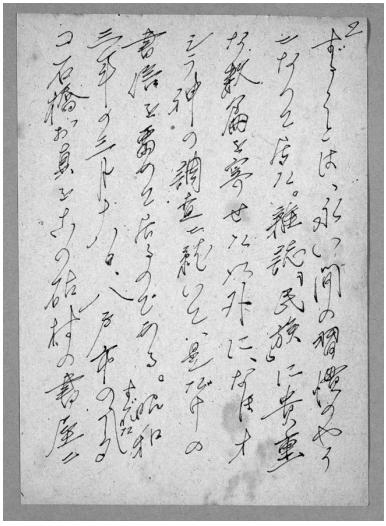

写真3　「『大白神考』序文の差し替え文」
（成城大学民俗学研究所所蔵）

イ　序文の差し替え

成城大学民俗学研究所には「『大白神考』序文の差し替え文」(三)が所蔵されており、この内容は刊行されたものとほぼ一致する。資料32との比較により、この差し替えは資料32の校正後に行われていることが分かった（写真2、写真3）。

作成順序としては、資料32執筆終了（昭和二十六年五月）→資料32校正→差し替え（同年七月）→差し替え文校正→刊行（同年九月）である。

差し替え箇所は実業之日本社版『大白神考』四十一頁から四十三頁である。資料32では用紙四枚分だったが、十枚にわたる文章に差し替えられている。差し替え箇所の全文を翻刻1、翻刻2として本稿に掲載したが、内容の大きな違いは次の通りである。

①八戸のイタコ石橋お貞を招きオシラ遊びをした日(四)にネフスキーが参加していたか否かについて、資料32では参加していたとあるが、差し替え原稿では「来なかった」と書かれている。

②ネフスキーとの最後の対面について曖昧な記憶ながら加筆されている。

③ソビエトに帰国したネフスキーの研究成果がどのように残されているか心配し、これに続けて資料32では「さうして私は何れの日にか、親しくそれを目に触れて、昔を懐かしむことが出来るのであらうか」とあるが、差し替え原稿では「いつの時にかまはりまはって、日本にも其結果が傳はり、彼と袂を分ってからのこの私の一國限りの研究と、比べ合せて見ることの出來るやうな、樂しい文化の交流期が出現することを切望せざるを得ない」という、より明確な意志をこめた文章に変わっている。

④ネフスキーの日本滞在期間については、資料32では「十五年餘り」、差し替え原稿では「十五箇年」、実業之日本社版は「十何年か」となっている。

⑤資料32は「昭和二十六年五月　柳田國男」、差し替え原稿及び実業之日本社版ともに「昭和二十六年七月柳田國男」となっている(五)。

【翻刻1】『大白神考』序文「オシラ様とニコライ・ネフスキー（原題：我々のオシラ仲間）」差し替え前の文章（資料32より、千葉県立中央博物館蔵）

202「最後に」以降が差し替えられた。
資料32に校正で加筆された言葉を傍線付きで示した。

202
六ばかり若かったのである。最後
に逢った日は覚えないが、昭和三
年（一九二八）の三月十八日。この喜多見原
の新居に於て、石橋お貞といふ
八戸のすぐれたイタコを招いて、
オシラ様の祭を営んだ日には、

203
彼も参会して終日歓談したことが
記録に残って居る。フィンランド
の学者公使、ラムステッド教授も
同席せられた。多分それから一
年とはたゝぬうちに新たなるソヴ
エットの大学に還り、それっきり文

２０４
通が絶えてしまったのである。彼
の東洋に目を送ったのは、若い
盛りの十五年餘りであった。勿
論さまざまの愁と悩みはあった
らうが、一生の思ひ出といふべきも
のは、大抵はこの中に在ったらう

２０５
とも想像せられる。如何なる形
を以てそれが彼の国には残り傳ハ
って居るのであらうか。さうして
私は何れの日にか、親しくそれを目に
触れて、昔を懐かしむことが出来
るのであらうか。

昭和十六年五月　　柳田國男

【翻刻２】『大白神考』序文の差し替え文（成城大学民俗学研究所所蔵）

差し替え文校正で加筆された言葉を傍線付きで、削除された言葉を取り消し線で示した。実業之日本社版、定本第十二巻との差異は注で示した。

其頃の日記を出して見ると、我々
のこしらへて居た幾つかの集會に、
彼の出て來なかったことは稀で
あり、又旅行にもよく同行した。小
樽から大阪へ、居住の場處を移し
てから後も、屢々東京に出て來て
我々を訪ひ、新たなる見聞を談

２
ずることは、永い間の習慣のやう
になって居た。雑誌「民族」に貴重
な數篇を寄せた以外に、なほオ
シラ神の調査に就いて是だけの
書信を留めて居るのである。昭和
三年の三月十八日、八戸市のすぐれたイタ
コ石橋お貞をこの砧村の書屋ニ

3

招いて(六)最初のオシラ遊びを催した日には、芬蘭の學者公使ラムステッド博士、ソヴェットの學士院のグルスキナ夫人なども參加して、珍らしい歓談の機會をもったが、(七)どういふ故障であったかネフスキー君は來なかった。さうして僅か半月ほどの後に訪ねてくれたのだから、其日の(八)話題の何であつたかは、今からでも推測することができる。彼が本國に還つて往つて、レニングラードの大學に講義をする

4

ことになつたのは、多分同じ年のうちであったらうと思ふが、この後何度ほど(九)逢うて語り、いつが最終の對面であったかは、あひにくに日記が(一〇)欠けて居て、もう不明になってしまった。しかし少なくとも

6

御別れの言葉を、取交したやうな記憶が私には無いから、恐らくは程無く又やって來るつもりで急いで立ち、其望みがつひに達せられなかつたものと思ふ。然るに一方に私のオシラ研究は遲々として進まず、たま〳〵

5

一二の小篇を世に公けにした際には、必ず是□を彼の處へ郵送することにして居たのだが、それも届いたか(一一)どうかがはっきりとしなかった。今頃この様な一冊を纏めて見るのも、言はゞ終りを全うせざる

7

8
友情の悲しき記念である。(一二)十五
箇年の日本生活に於て、ネフス
キー君の心を留め、積み貯へて行
った知識の中には、この國の少
壯學徒でもまだ省みなかったも
のが色々とあるあらゆが、わけてもオシラ

9
様の問題などは大きな印象で
あり、又深い關心の的であったこ
とは、こゝに存錄した數通の書翰か
らも推測し得られる。それを本國
に携へ還って後に、如何に活用し
又は成長させ、且つその所得を同

10
學の間に如何に分配したであらうか。
私はもうそれを確かめる機會を
持ち得ないにしても、いつの時にか
まはりまはって、日本にも其結
果が傳はり、彼と袂を分ってか
らのこの私の一國限りの研究と、

11
比べ合せて見ることの出來るや
うな、樂しい文化の交流期が
出現することを切望せざるを得ない。
昭和二十六年七月　柳田國男

ウ　序文の題の変遷

資料32では「我々のオシラ仲間」に取り消し線が引かれ、「オシラ様とニコライ・ネフスキー」と書き直されている。実業之日本社版では「序文―オシラ様とニコライ・ネフスキー―」である。

『大白神考』所収「オシラ神の話」では柳田よりも熱心にオシラ神研究に取り組む者として佐々木喜善とネフスキーの名が挙げられ〔柳田　一九五一　二～三〕、序文では「この一冊の書物を、まとめて世に遺さうといふ志は兼て抱いて居たが、（中略）そこで主としてネ

フスキー君の功労に属することを、拾って解説して見ようといふのが私の願ひである」〔柳田　一九五一三六～三七〕と記されている。

序文の差し替えや題の変更の背景には、ネフスキーのオシラ神研究の成果を少しでも書き残し伝えようという柳田の意思があったといえる。なお、のちに柳田は神戸新聞で連載した「故郷七十年」においても六回にわたってネフスキーの話題を取り上げ、その研究の功績を紹介している(一二)。

(二)「祝棒の変遷」(『大白神考』原稿)

ア　資料概要

本資料（以下、資料33、写真4）は『大白神考』所収「おしら神と執り物」の柳田直筆原稿である。原稿右上には一枚ごとに通し番号が振られ、節ごとに一～七、八～十、十二～十三、十四～十五、十六～十八の四束に分けられそれぞれこよりで綴じられている。なお十一がなく、十二以降は番号が一つずれた状態で書かれているため、実際は十七節で構成されている。赤ペンで校正がされている。なお資料33が入っていた封筒には、前述の標題ラベルのほかに「東京市世田谷区成城町三七七　柳田國男／東京市外砧村　柳田國男」の印が押されていた。

写真4　資料33「祝棒の変遷」封筒と原稿
（千葉県立中央博物館所蔵）

イ　題の変遷

資料33原稿での題は「祝棒の変遷―オシラサマに関する一説―」だが、刊行時は「おしら神と執り物」に

写真5　資料33「祝棒の変遷」標題の変更
（左：原稿、右：封筒のラベル）

変更されている。また封筒のラベルは「祝棒の沿革」と書かれたのち赤字で「祝棒の変遷」と修正されている（写真5）。

当初の章題に用いられていた「祝棒」という言葉は、『大白神考』「おしら神と執り物」本文中に登場している。柳田は本章の中で、正月十五日前後に子どもたちが手に木の棒を持って唱えごとをすることを挙げてオシラサマと一致していると指摘し、次のように述べている（番号は筆者による）。

①

ともかくも今ある正月の祝棒の中には、桙と名づけてもよいやうな一端を尖したものがまだそちこちに有る。しかし其名を通用しようとするには考証を要するのだから、今は少しく遠慮をして祝棒と書き、我々だけは之をイワヒボウと呼ぶことにしてはどうかと思ふ。是ほど變遷を重ねた東北のオシラサマとても、その本質からいへば祝棒にはちがひない。

〔柳田　一九五一　一七九〕

②

ともかくも是（筆者注：幣束のことか）を手に執る者が祭りの主役であることはかはらなかった。（中略）私は便宜の爲に是等を総称して祝棒といふことにして居るが、古い習はしに従えばトリモノといふ方が當ると思つて居る。

〔柳田　一九五一　一九五〕

当初は①を強調し「祝棒の変遷」としたものの、何らかの理由で②に沿うような「おしら神と執り物」という題に変更したと考えられる。

ウ　初出と執筆時期

本稿の初出は、昭和二十二（一九四七）年六月十五日発行の『新國學談　第二冊』（小山書店）に掲載された「おしら神と執り物」である。本書刊行以前に「おしら神と執り物」あるいは当初の題とみられる「祝棒の変遷」が発表された書誌は管見の限り認められないため、柳田は執筆を終えたものの刊行せず、昭和二十二（一九四七）年『新國學談　第二冊』への掲載をもって初めて本稿を公表したと考えられる(一四)。

「おしら神と執り物」の脱稿時期だが、『新國學談第二冊』所収の「おしら神と執り物」末尾には「昭和十五年十月」と記されている〔柳田　一九四七一八四〕。実業之日本社版『大白神考』、『定本柳田國男集　別巻第五』の書誌欄でも「昭和十五年十月」となっているが、赤坂憲雄は脱稿時期を「昭和十八年七月」と推定している〔赤坂　一九九四　三四一～三四二〕。その理由の一つに、柳田の「自分が是に関心をもち、やゝ意見のやうなものを公表してからでも、もう三十二年にもなるが」という記述に対して、「昭和十五年から三十二年を遡った明治四十一年にはいまだ、柳田のオシラサマ論は一編も公表されていない」ことを挙げている〔赤坂　一九九四　三四一〕。

資料33の該当部分では「もう三十二三年」とさらに遡っている。なお本資料の末尾に脱稿時期は記されておらず、この原稿から時期を断定することはできない。むしろ、「昭和十五年十月」は何を根拠に記されたのかという新たな疑問が生じた。

エ　内容の差異

次節で扱う資料34「柳田國男自筆原稿と『大白神考』（実業の日本社）校合」を参照しつつ資料33と『新國學談　第二冊』、実業之日本社版『大白神考』を比較すると、誤字脱字の修正や言葉の加除修正が行われていることがわかった。次に掲げるのは、資料33、『新國學談

第二冊』、実業之日本社版『大白神考』の同一箇所の本文であり、①と②で共通する文章、②と③で共通する文章がある。ほかにも①～③で異なる文章がいくつかあり、それを比較すると、作成時期の早い順から①→②→③であることが分かった。

①資料33

オシラの起りは白いといふこととは関係無く、元はヒラであって蛭蒜柊などと共に、触れるとヒヒラグからの名であり、現在は蛾も蛹も共にヒル・ヒヒルといふけれども、本来は毛虫の経験、即ちまだこの有用の虫を飼はぬ前から、引継いだ名であらうといふことは、私だけはほゞ信じて居る。

②『新國學談　第二冊』一二七頁

オシラの起りは白いといふこととは関係無く、元はヒラであって蛭や柊などと共に、觸れるとヒヒラグからの名であり、現在は蛾も蛹も共にヒル・ヒヒルといふけれども、本來は毛蟲の經驗、即ちまだこの有用な蟲を飼はぬ前から、引繼いだ名であらうことはといふことは、私だけはほゞ信じで居る。

③実業之日本社版『大白神考』一三七頁

オシラの起りは白いといふこと、關係無く、元はヒル・ヒヒルといふ名の起も、本來は毛蟲の經驗、即ちまだこの有用な蟲を飼はぬ前から、引繼いだ名であつたことは私だけはほゞ信じて居る。

(三)「柳田國男自筆原稿と『大白神考』(実業の日本社)校合」

ア　資料概要

「柳田國男自筆原稿と『大白神考』(実業の日本社)校合」(資料34)は、千葉県教育庁文化財課の茶封筒に入れられており、封筒には「平成元年平野馨氏に依頼」と書かれている。

封筒の中には『大白神考』(柳田國男先生著作集第十一冊、実業之日本社)のコピーが入っており、ここに①資料32校正箇所及び差し替え文が赤ボールペンで、定本第十二巻掲載の『大白神考』との差異が青ボール

ペンで記入され、②資料33との差異が赤ボールペンで書き込まれている。これは千葉県職員として勤務し千葉県立大利根博物館長なども務めた平野馨が千葉県立中央図書館からの依頼を受け作成したものと考えられる。原稿と、刊行されたものの大きな差異については本稿で取り上げたが、これ以外にも加除修正が行われている。その内容については別稿に譲ることとしたい。

第二章　佐々木喜善、ニコライ・ネフスキーによる柳田國男宛書簡

これらは封筒に便箋一枚、メモ一枚が入った状態で千葉県立中央図書館にて保管されていた。

（一）佐々木喜善書簡

ア　資料概要

資料35「佐々木喜善書簡（柳田國男宛）」便箋には、佐々木喜善がネフスキーからオシラ神研究について手紙を受け取ったこと、隣家のオシラ神を初めて見たこと、大同家のオクナイサマ神像とオシラ神が法華宗へ

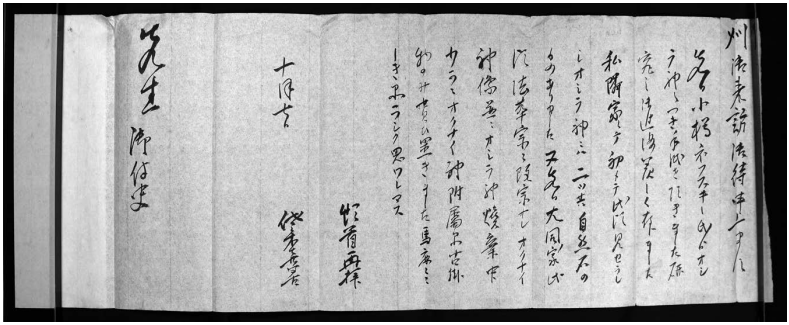

写真6　資料35「佐々木喜善書簡（柳田國男宛）」（千葉県立中央博物館所蔵）

の改宗に伴い焼き捨てられてしまったことなどが記されている（写真6）。

【翻刻3】「佐々木喜善書簡（柳田國男宛）」

□御来訪御待申上ます
先日小樽ネフスキー氏ゟオシ
ラ神につき手紙を頂きました研
究之御進捗芳しく存じました
私隣家ニテ初メテ此頃見セラレ
之オシラ神ニハ二ツ共自然石の
ものありました　又先日大同家此
頃法華宗ニ改宗サレオクナイ
神像並ニオシラ神焼棄□
少か□オクナイ神付属に古掛
物のみ貰ひ置きました　馬鹿〃〃
しき品ラシク思ワレマス
頓首再拝
十月七日　佐々木喜善
先生　御侍史

イ　手紙の送付時期に関する考察

本資料には手紙の執筆年が書かれていないが、「先日小樽ネフスキー氏ゟ（中略）手紙を頂きました」とあり、ネフスキーが小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）でロシア語教師を務めた大正八（一九一九）年から[一五]大正十一（一九二二）年三月末まで[一六]の間に書かれたものといえる。また、佐々木は日記に手紙やはがきの受取日や差出日を詳細に記録しているためこの期間の日記を確認したところ、大正八年の十月七日に「柳田先生から原稿について手紙を頂く。先生に手紙を出す。啓明会[一七]のことも書き加へる」との記述があった。

大正六（一九一七）年八月二十六日～九月三日にネフスキーが遠野を訪れた際に佐々木が案内をしており、二人の交流はこの頃からと考えられる。当時もネフスキーはオシラサマの調査をしており、無理を言って佐々木家のオシラサマを貰い受けた。その後二人は手紙のやり取りを続け、大正八年九月二十七日にネフスキーから手紙があり、翌日喜善が「ネフスキー君に手紙を書く。オシラ神の返事なり」と返信し、さらに十

月一日にもネフスキー宛てに手紙を出している。〔遠野市立博物館編　二〇〇三　一九二〕

資料35に啓明会の記述はないが、日付の一致や、直前にネフスキーから「オシラ神」に関すると思しき手紙を受け取っていることから、資料35は大正八年十月七日に、佐々木が柳田に宛てて書いたものと推定される。

なお柳田の勧めにより、翌年三月から二人はオシラサマ研究を共同で行うことになる〔岡編　一九七一一六五、一八九〕。二人は調査を進め、その結果を記したカードを送り合うとともに、進捗を柳田へも報告していた(一八)。

(二) ニコライ・ネフスキー封筒（柳田國男宛）

資料36は、佐々木喜善が柳田に宛てた便箋とイラストの描かれた紙が入った状態で、県立中央図書館にて保管されていた。いつ、どのような経緯でこの封筒にまとめられたかは不明である。

『大白神考』にはネフスキーが柳田へ送った書簡が掲載されているが、この中に「大正十年四月十三日」に書かれたものがある。資料36の消印は「10・4・14」となっており、『大白神考』掲載の書簡を送るのに使われたものである可能性が高い。

【資料36】ニコライ・ネフスキー封筒（柳田國男宛）

封筒：（表）「東京市牛込加賀町二ー十六　柳田國男先生　親展」（消印）「小樽　緑町／10・4・14／前0」、（切手）拾銭、参銭

（裏）「北海道小樽区緑町二ー二八」「ネフスキイ今」「志メめ」、消印「□4・16／前□ー□」

(三) オシラ神祭祀メモ

資料37は縦九・七cm、横一〇・四cmの大きさで、罫線入りの紙に紫色のペンで祭祀の道具が描かれている（写真7）。

ア　作成の背景

大正十年二月二十日付の佐々木喜善宛てネフスキー書簡（遠野市立博物館所蔵、写真8）に、この絵と一致する記載がみられる。ネフスキーは、同封した写真

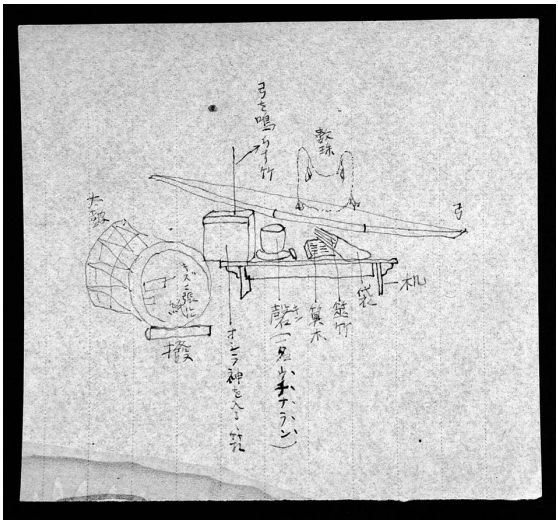

写真７　資料 37「オシラ神祭祀メモヵ」
（千葉県立中央博物館所蔵）

三枚について、宮城県登米郡佐沼町（現在の登米市）に住んでいた「遊佐（ユサ）カメヨと云ふオカミン（中略）、彼の女のオシラサマと、道具揃へ」の写真と記しており、これに続く道具の説明が資料番号37と一致している。同封されていたという写真は確認できなかったが、内容や筆跡の一致から鑑みて資料番号37は、佐沼町のオカミン、遊佐カメヨの祭祀道具をネフスキーが描いたものと考えられる。

なお遊佐カメヨについては『大白神考』のネフスキー書簡にも言及がある〔柳田　一九五一　二四七～二六五〕（一九）。これは大正九年八月にネフスキーが行った東北地方の民俗調査について柳田に報告したもので、書簡によればネフスキーは八月二十八日早朝に石巻を発ち、登米郡南方村（現在の登米市）に住む高橋清治郎のもとで一泊し、翌日には佐沼を後にしている。こ

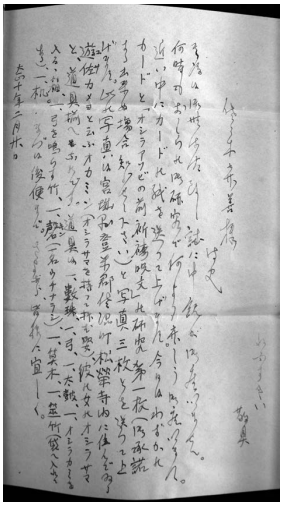

写真８　大正十年二月二十日付　佐々木喜善宛てネフスキー書簡
（遠野市立博物館所蔵）

の二日間、佐沼で民俗調査を行い、遊佐カメヨの話を聞いたとみられる。写真がいつ撮影されたのかは佐々木宛の書簡には書かれていない。

なお、この東北地方で行った民俗調査の内容は「東北地方民間伝承ノート断片」として天理大学附属天理図書館にて保管されているが、現存するのはノートの一部が裂かれた状態のもので、オシラサマに関する記述の頁は無い〔石井　二〇一七　一二八～一二九〕。柳田への書簡の内容から、この時ネフスキーがオシラサマ調査を行ったことは間違いないが、その結果を記した部分は失われてしまったようで、遊佐カメヨに関する情報を彼の調査記録から追うことは困難である。

ここで、前項で上げた「大正十年四月十三日」ネフスキー書簡と併せて考察したい。これはロシアの管狐の話題のほか「お約束のオカミンの寫眞を送つて上げますから何卒お受取り下さいまし。先日拝借致しました中道君の手紙も（祭文と一緒に）有りがたく御返し申します」とある〔柳田　一九五一　二七九〕。また本書の口絵写真には「佐沼町松栄寺内に住居する遊佐かめよがオシラサマを持ち拝んでゐる　オカミン　大正九年九月　ネフスキイ氏蔵」が掲載されている。これが四月十三日に送られた写真であるとすると、資料37は、遊佐カメヨの写真をネフスキーが柳田へ送った際の説明のため付したものであり、その時に使われたのが資料36の封筒であるとも推測できる。

第三章　『婚姻習俗語彙』執筆用メモ

資料1～31は昭和十二（一九四七）年刊行の『婚姻習俗語彙』（柳田國男、大間知篤三共著、民間伝承の会）執筆にあたり作成されたものと考えられる。

「婚（番号）」のラベルが貼られた封筒には、『婚姻習俗語彙』執筆にあたり各地の事例を書き連ねたと思しき柳田直筆メモが入っており、封筒に付けられた「婚（番号）」は同書の章立てと対応している（写真9）。序文、引用書名略字表、索引のほか、「二五　嫁の産屋」、「二六　杓子渡し」、「二九　宿の生活」、「三一　私生兒」のメモと封筒はない。

メモには語彙とその意味、使用地域などが書かれており、裏面には「婚（番号）」などとメモの通し番号と

写真９　資料２『婚姻習俗語彙』執筆メモ「婚二　嫁の盛装する日」
（千葉県立中央博物館所蔵）

みられる番号がスタンプされている。

これらのメモは「財団法人　民俗學研究所」と印字された封筒に入れられていた。昭和二十二（一九四七）年に設立された民俗学研究所が財団法人の認可を受けるのは翌年のことであるため、これ以降に章立てに合わせた封筒への整理が行われたとみられる。なお昭和三十二（一九五七）年の同所解散後も柳田の手元に残っていた封筒に入れたとも考えられる。

おわりに

以上、千葉県立中央博物館所蔵の「柳田國男直筆原稿・メモ及び柳田宛書簡」について、その概要紹介とともに各資料の制作時期や背景について考察を試みた。最後に、これら資料群の意義について述べる。

一点目は、『大白神考』序文全体の原稿や、「おしら神と執り物」原稿の発見により、刊行されたものと比較してその内容の変遷を確かめることが可能となった点である。刊行版には原稿の誤読による間違いも散見されるため、原稿にあたることができるようになった

ことは大きい。

二点目は、『婚姻習俗語彙』の執筆メモについては詳細を調査前だが、今後『婚姻習俗語彙』との比較によって語彙の取捨選択や出典を確かめられる可能性がある、ということである。

三点目は佐々木喜善とネフスキーのオシラサマ共同研究に関する資料を発見できたことで、すでに他機関で所蔵されている資料と突き合わせ、オシラサマ習俗を記録した新資料として今後の研究に活用し得ることである。

これらを踏まえ、柳田國男研究や民俗学の研究に資する資料として、博物館において資料保存及び利用機会の提供に務めていきたい。

なお同館では柳田國男著作の初版本を蒐集した資料群「柳田國男著書および関係書籍」も所蔵しており、本稿は『新國學談　第二冊』はじめこれらを参照しつつ執筆したものであることも述べておきたい(二〇)。

謝辞

本稿の執筆にあたっては遠野市立博物館の菅野様、成城大学民俗学研究所の皆様、天理大学附属天理図書館の皆様より、資料調査や画像提供へのご協力を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

注

(一) ロシア（ソ連）出身で日本の民俗研究をはじめアイヌ語や宮古島の方言、西夏語研究など言語学でも大きな業績を挙げた。大正四（一九一五）年に初めて柳田のもとをを訪れたようで、昭和四（一九二九）年にソ連へ帰国している。

(二) 柳田は他の原稿やメモを整理する際にもこのような赤いフチのラベルを使用していた。

(三) 「『大白神考』序文の差し替え文」昭和二十六（一九五一）年七月作成、十一枚。「東京市外砧村　柳田國男」の印字、「大藤氏渡シ」のラベル貼付の封筒に入れられている。

(四) 昭和三（一九二八）年三月十八日「八戸のイタコ石橋貞子を招いてオシラ様の祭りをおこなう。以後毎年の行事としておこなう」〔定本柳田國男集編纂委員会編　一九七一　六三八〕

(五) 『定本　柳田國男集第十二巻』（筑摩書房）は「昭和二十六年七月」で、柳田の署名がない

(六) 実業之日本社版及び定本では削除

(七) 実業之日本社版及び定本は「何か故障であったか」

（八）　実業之日本社版及び定本は「話題の是であつたことは」

（九）　実業之日本社版及び定本は「逢ひて語り」

（一〇）　定本は「日記が缺けて居て」

（一一）　実業之日本社版及び定本は「どうかつひにはっきりとしなかった」

（一二）　実業之日本社版及び定本は「十何年」

（一三）　神戸新聞にて、昭和三十三年七月十二日「露人ネフスキーのこと」、昭和三十三年七月十三日「ネフスキーの功績」、昭和三十三年七月十五日「ネフスキーのノート」（刊行時「ネフスキーの晩年」）、昭和三十三年七月十六日「宮古島語の発音」（刊行時「ネフスキーのノート」）、昭和三十三年七月十七日「おしら様（上）」、昭和三十三年七月十八日「おしら様（下）」が掲載。『故郷七十年』としてのじぎく文庫から刊行。なおネフスキーが妻のイソとともに昭和十二（一九三七）年に粛清の中で逮捕・処刑されていたことが明らかになったのは一九九〇年代のことであり、スターリン批判後のソ連による情報公開では病死とされていた〔加藤　二〇一一　三三五〕。『大白神考』執筆当時の柳田はまだその死を知らず、さらに死亡時期については情報が錯綜していたようで〔石田　一九五六　二一九六～二九七〕、『故郷七十年』では牢死したと記されている。

（一四）　昭和二十（一九四五）年七月一日の日記に「書物になる文章を整頓す。『十三塚考』と『大白神考』とは當分出版も六つかしければ一つの箱に入れる。どこかへ預けたし」〔柳田　一九五八　二七五〕とありこの頃には書名が決まっていたことがわかる。

（一五）　小樽高等商業学校講師に任命されたことを伝えた葉書より（ネフスキーより佐々木喜善宛、大正八年七月三日付、遠野市立博物館所蔵）。なお石井正巳は大正八（一九一九）年から同校ロシア語教師嘱託となったと報告している〔石井　二〇一七　一一一〕。

（一六）　四月から大阪外国語学校へ移ることを伝えた葉書より（ネフスキーより佐々木喜善宛、大正十一年三月二十二日付、遠野市立博物館所蔵）。

（一七）　大正七年八月に設立され、研究助成等を行っていた財団法人啓明会のことか。

（一八）　佐々木から柳田宛の書簡は『佐々木喜善全集（Ⅳ）』、ネフスキーから柳田宛の書簡は『大白神考』やネフスキー著作集『月と不死』などに収録されている。

（一九）　ネフスキーは複写で書簡の控えを保管していた。この柳田宛書簡の控えも残されており、『月と不死』に掲載されている〔岡　一九六六　二一九～二三二〕。原本は天理大学附属天理図書館蔵。

（二〇）資料群の詳細は、玉井里奈「千葉県立中央博物館新収蔵資料『柳田國男著書および関係書籍―平野亥一コレクション―』について」として『千葉県立中央博物館研究報告』第十八巻（二〇二六年三月）に掲載予定。

参考文献

赤坂憲雄『漂泊の精神史―柳田国男の発生―』小学館、一九九四年

「解題　大白神考」『柳田國男全集　第十九巻』筑摩書房、一九九九年

石井正巳「ニコライ・ネフスキー遺文抄（六）―［東北地方民間伝承ノート断片］―」天理図書館編『ビブリア』一四七号、天理大学出版部、二〇一七年

石田英一郎『桃太郎の母　比較民族学的論集』法政大学出版局、一九五六年

岡正雄編『月と不死』平凡社、一九七一年

加藤九祚『完本　天の蛇　ニコライ・ネフスキーの生涯』河出書房新社、二〇一一年

定本柳田國男集編纂委員会編『定本柳田國男集　別巻第五』筑摩書房、一九七一年

遠野市立博物館編『佐々木喜善全集（Ⅳ）』遠野市立博物館、二〇〇三年

柳田國男『新國學談　第二冊』小山書店、一九四七年

『大白神考』実業之日本社、一九五一年

『炭焼日記』修道社、一九五八年

『定本　柳田國男集第十二巻（新装版）』、筑摩書房、一九六九年

成城大学民俗研究所　デジタルアーカイブ「『大白神考』序文の差し替え文」https://adeac.jp/seijo-univ-inst-folklore/catalog/mp000280-200010

玉井里奈「資料収集・調査・展示―日本民俗学の父・柳田國男にかかわる資料をめぐって―」「中央博物館だより75号」千葉県立中央博物館、二〇二五年 https://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/research/publication/publication-16588/

表　千葉県立中央博物館所蔵「柳田國男直筆原稿・メモ及び柳田宛書簡」一覧

本稿での番号	資料名	千葉県立中央博物館資料番号
1	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚一　嫁入りの起り	HM 歴史 0000637-0001
2	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚二　嫁の盛装する日	HM 歴史 0000637-0002
3	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚三　迎へ人	HM 歴史 0000637-0003
4	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚四　嫁渡し	HM 歴史 0000637-0004
5	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚五　嫁入行列	HM 歴史 0000637-0005
6	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚六　入家式	HM 歴史 0000637-0006
7	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚七　中宿	HM 歴史 0000637-0007
8	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚八　花嫁同行者	HM 歴史 0000637-0008
9	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚九　朝聟入	HM 歴史 0000637-0009
10	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚十　聟逓がしと膝直し	HM 歴史 0000637-0010
11	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚十一　打明け	HM 歴史 0000637-0011
12	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚十二　結納聟	HM 歴史 0000637-0012
13	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚十三　手締めの酒	HM 歴史 0000637-0013
14	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚十四　見合ひ	HM 歴史 0000637-0014
15	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚十五　歸り聟	HM 歴史 0000637-0015
16	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚十六　仲人親	HM 歴史 0000637-0016
17	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚十七　嫁の食物	HM 歴史 0000637-0017
18	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚十八　水盛と酒盛	HM 歴史 0000637-0018
19	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚十九　村人の承認	HM 歴史 0000637-0019
20	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚二〇　若者酒	HM 歴史 0000637-0020
21	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚二十一　聟いぢめ	HM 歴史 0000637-0021
22	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚二十二　部屋の生活	HM 歴史 0000637-0022
23	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚二十三　親類成り	HM 歴史 0000637-0023
24	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚二十四　嫁と其親里	HM 歴史 0000637-0024
25	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚二十七　出入初め	HM 歴史 0000637-0025
26	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚二十八　嫁もそひ	HM 歴史 0000637-0026
27	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚三十　嫁入前の妻	HM 歴史 0000637-0027
28	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚三十二　獨身女の境遇	HM 歴史 0000637-0028
29	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚三十三　自由なる女性	HM 歴史 0000637-0029
30	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚三十四　絶縁	HM 歴史 0000637-0030
31	『婚姻習俗語彙』執筆用メモ　婚三十五　所属未定	HM 歴史 0000637-0031
32	おしら初稿了（『大白神考』序文原稿「オシラ様とニコライ・ネフスキー」）	HM 歴史 0000637-0032
33	「祝棒の変遷」（『大白神考』原稿）	HM 歴史 0000637-0033
34	柳田國男自筆原稿と「大白神考」（実業の日本社）校合	HM 歴史 0000637-0034
35	佐々木喜善書簡（柳田國男宛）	HM 歴史 0000637-0035
36	ニコライ・ネフスキー封筒（柳田國男宛）	HM 歴史 0000637-0036
37	オシラ神祭祀メモ	HM 歴史 0000637-0037